【書評】片山善博『差異と承認—共生理念の構築を目指して—』 創風社 二〇〇七年
片山善博氏著『差異と承認—共生理念の構築を目指して—』を読む

石川, 伊織

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

63

(終了ページ / End Page)

66

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007947>

【書評】

片山善博『差異と承認——共生理念の構築を目指して——』創風社 二〇〇七年

片山善博氏著『差異と承認——共生理念の構築を目指して——』を読む

石川 伊織

承認論は近代自然法との関わりで論じられてきた。本書は、この承認論の祖形として、フィヒテが一七九六年の『知識学に基づいた自然法の基礎』で展開する議論と、ヘーゲルが「イエナ体系構想」と『精神現象学』とで展開する議論とを取り上げ、これを簡潔に整理した上で、この議論の現代的な受容・変容・批判としてのフォイエルバッハ、チャールズ・テイラー、竹村和子、ジュディス・パトラー等の議論を総括してみせる。とりわけ著者が専門とするヘーゲルの議論の捉えなおしには目を見張るものがあり、さらには現代思想へとつながる広い射程とが示されて、承認をめぐる議論状況を知る上でもきわめて意義深い著作と言えよう。

フィヒテの承認論では、主体は他の主体の自由を承認するが、それは主体を主体たらしめている主体の実働性(Wirkamkeit)が、他の理性的存在者の「促し」によって成立するものだからである。フィヒテにとって、自由な個人が他者の自由を承認するとは、著者の整理では、自己の自由を相互に制限することであるが、これが他者との共同具体的な自由の実現を可能とする。「各人が自分の自由な意識に到達できるのは、他の人間が彼を自由な行為へと促すことによつてなのである」(本書一八頁)。

イエナ期のヘーゲルは、このフィヒテの承認論を受容することから始めるが、はやくも一八〇三/〇四年の『精神哲学I』では、「各人が他者の意識の中に自己を定立し、他

の個別性を廃棄する」(本書二九頁)という承認のあらたな展開が見られる。著者が注目するのは、この、「互いに自己を廃棄しあう」という契機である。

『精神現象学』の相互承認論についても、これまでの常識的な扱いは、欲望から承認をめぐる闘争を経て、主人と奴隷の弁証法へという叙述がなされている。「自己意識」章に関して論じられるのが常であった。しかし、著者は、自分の中に他者を見るという契機を重視する観点からは、むしろ「精神」章の良心論のほうが重要である、とする。

「自己意識」章が対自と対他の関係を軸に、他者の否定へといたる理論を展開しているとすれば、「理性」章では即自と対自の関係が中心であり、「精神」章に至って始めて対自・対他・即自の關係が十全に展開される。ここにおいて初めて、承認の成立ということが語られうるのであり、また、他者との共生の論理が見出されるのだ、というのが著者の主張であろう。

承認論が自然法思想との関連で論じられてきた経緯からしても、個別主体と社会という普遍性の対立構造をどう捉えるかが、問題であり続けてきた。個別主体の自立を前提に、これを絶対視し、個別主体相互の契約という概念で普遍性、すなわち国家の成立を説く、というのが社会契約説の論理構造である。ヘーゲルは個別主体から始まる社会契

約説を批判したのだ、というのが常識的な理解ではある。ヘーゲルを批判する側もまた、個別主体より以前に絶対的な国家理性を立てるところが全体主義であり、国家主義である、と応酬する。しかし、問題構成はこのようにはなっていない、というのが著者の主張であろう。これを論ずるために、著者は現代の承認をめぐる議論を概観するのである。

承認の問題はアイデンティティーの問題と結びついている。《私は私である》と主張するためには、そのように承認されていることが必要である。《私は私である》は、《私は私ではない何かではない》を意味する。承認を得るとは、こうして承認に与らない外部を排除することだ。そしてこの排除は、《私は私を承認する者たちの党派に属する》という帰属意識とつながる。アイデンティティーと承認には、権力関係が働いているのである。テイラーと竹村の対立は、こういう構造をとるアイデンティティーを必要なものとして認め、承認論を是認するか、それとも否定するかの違いである。著者は、以上の議論を踏まえて、現代の承認論をめぐる議論を三つに分類する。第一は承認を肯定するテイラーらの立場であり、第二はこれを他者排除として否定する竹村らのアイデンティティー・ポリティクス批判である。しかし、両者はともに、《私》を変化しない実体的な何かと

見なしている。この点で、これら二つの視点は共通している。これに対して、第三がバトラーの立場である。

バトラーの承認論は、「自己の承認が新たな排除すべき他者の産出に加担していることを見極め、自らが意識的であれ、無意識的であれ、排除している他者を、自らの核心にすえ続けていくような自己意識の ec-static (脱・静態的) な構造を強調した承認論」(本書一八八頁)である。バトラー自身も述べているが、バトラーがこのような承認論を構想する基底には、彼女のヘーゲル研究がある。『精神現象学』の承認論は、承認を通して自己意識が変容を遂げる過程を叙述するものである。前提としてある個別主体が、承認前も承認後も同一の抽象的主体として経済活動の担い手であり続けるような、古典的な社会契約説における主体はありえない。ヘーゲルの自己意識は承認によって変化し、それによって権力構造も変化し、他者もまた変化を遂げる。そうした主体と権力構造の動的変成の過程が「承認」なのである。バトラーにならって、著者もまた、こうした承認の可能性を探求する。その根拠を示そうとするのが、本書前半の中枢をなす『精神現象学』の考察であり、『精神現象学』の承認論の重要なモチーフは、「自己意識」章にではなく「精神」章にあるのだ、とする著者の見立てであり、ここから抽出される「承認による自己意識相互の自己否定」

という理論である。そして、「自己意識の相互否定」というこの発見から、著者は「共生」を理論化する可能性を見出すようにするのである。

著者とは別の角度からではあるが、書評子もまた、ここ数年バトラーを読みつつ、同様の感想を抱いていた。バトラーは優れたヘーゲルの読み手である。バトラーは、ヘーゲルを批判して、ヘーゲルを換骨奪胎してジェンダー論を組み立てたのではなくて、まさにヘーゲル内在的に、ヘーゲル自身の論理に語らせることで、あのジェンダー論を構築したのであると、書評子は考える。バトラーの理論の対極にあるとすら思われる『法哲学』の家族論でさえ、ヘーゲルの表面上の主張に反して、性差と家族とを「自然」であると云いくるめることによって初めて近代社会が成立するので、と読むことができるのである(拙稿、「家族の限界・国家の限界 または自然の捏造」(『現代社会におけるグローバル・エシックス形成のための理論的研究』平成一五年度〜一八年度 科学研究費補助金 基盤研究(B) 課題番号一五三二〇〇五 最終報告書 参照のこと)。もちろん、ヘーゲルがジェンダー論に行き着くことを自覚しつつ『精神現象学』や『法哲学』を書いたのではないことは、言うまでもない。しかし、展開される理論を正確に追跡するならば、そこに見えてくるのは、一九世紀初頭という時

代的制約を取り外してしまえば全く異なる結論につながるであろう、多様な論理の展開である。

ヘーゲルを現代的に読み直すといったような試みが、しばしば見受けられる。ヘーゲルを現代において「活用する」といったキャッチフレーズである。しかし、こうした言い方に共通しているのは、ヘーゲルの論理の核心は既に時代遅れである、という前提である。時代遅れであるからこそ、それを「現代的に読み直す」必要がある。時代おくれであるからこそ、「活用」しなくてはならないのである。そうしなければ、時代遅れな哲学を研究している研究者はメシを食えなくなるから。しかし、「時代遅れなものを現代的に読み直してみよう」といった態度の対極に、パトラーと本書の著者は立っている。

書評子が最近取り組んでいる、ヘーゲル美学の捉えなおしという仕事にひきつけて言うなら、ヘーゲルが実際に芸術作品にどう接したのかを示す資料と、これについてヘーゲルがどのような記録を残しているのかを調べていくと、『美学講義』で提示されているとされる常識的なテーゼを裏切るような、豊かな芸術体験をしていることがわかる(拙稿「旅の日のヘーゲル——美学体系と音楽体験：一八二四年九月 ヴェーン——」(『県立新潟女子短期大学研究紀要』第四五集所収参照のこと)。しかし、こうした体験といえど

も、一九世紀初頭の時代的制約を免れてはいない。ヘーゲルの死後に登場する様々なジャンルの芸術を体験したなら、ヘーゲルはどのような講義をしたであろうか。おそらくは、できの悪い弟子のホトーなどの想像を絶する理論を展開してくれたであろうと想像される。それでもなお、ヘーゲルは時代遅れだと言いたいのなら、そのように主張する者のステレオタイプ化したヘーゲル受容の歴史こそが時代遅れなのだと自覚すべきであろう。

本書は、ヘーゲルをしてヘーゲルを語らしめるという示唆にとんだ著作であり、一九世紀から現代に至る承認論をめぐる議論の概略を一望できる、学ぶところ大きい名著である。このような著作に接することのできた喜びを、読者と共有したい。